



TAJIMA TAKAO

田島貴男

(ORIGINAL LOVE)

ミュージシャン

今が音楽をやっていて一番楽しい時期。すごく自由になった

90年代から日本音楽シーンの最前線で活躍し、現在も精力的な活動を続けるORIGINAL LOVE。その中心人物である田島貴男さんは、ジャンルや枠組みにとらわれないさまざまな音楽を生み出しています。音楽を始めた中学時代からORIGINAL LOVEの最新アルバムをリリースした現在に至るまでのお話を伺いました。





ロックって最高！最初にスタジオに入った時の感動が忘れられない

——音楽との出会いは？

神戸にいた中学1年の頃、洋楽を聴いている友人が周りにいたんです。その影響で洋楽、特にロックが好きになって。歌謡曲がとにかくはやっている時代だったから、中1で洋楽のロックばかり聴いてる集団って、かなりマセてたと思います。それで、どうしてもギターが弾きたくなくて、親戚が持っていたクラシックギターを譲ってもらいました。そのギターは未だに持っています。

その後、お年玉でエレキギターを買って本格的にハマり、バンドを作りました。最初にスタジオに入った時の感動はすごかったな。それまで大きな音で演奏したことがなかったので、爆音でギターを鳴らしながら「ロックって最高じゃん！」って、友人と暴れまくりました！カバー曲や見よう見まねで作ったオリジナル曲を演奏したり、セッションしたり。とにかく楽しかったですね。中3で福島へ引越した後もバンドをやっていました。ポップコン*の仙台大会で優秀賞をもらったこともあるんですよ。

——高校卒業までは、地方に住んでいたんですね。

出身地は東京ですが、父親の転勤で中学の頃は神戸に、高校の頃は福島に住んでいました。大学進学で東京に戻ってきたんですが、高校の頃からライブハウスに行くという目的も兼ねて、福島から東京に住む親戚のおばさんの家に月1回程度の頻度で遊びに行っていました。

——高校時代には200以上のオリジナル曲のストックがあったそうですが。

バンドを組んで曲を作って、自主制作のテープを周りに配ったりしていました。今でこそ自主盤制作が当たり前になりましたけど、当時はかなり珍しいことでしたね。インディペンデントでレーベルやってるアーティストなんて、アンダーグラウンドもいいところ。下北沢にはそういう形で音楽をやっている人たちがいて、彼らのカセットやレコードを置いているお店も多かったんで、僕もそれにならって店に自作のテープを置かせてもらったんです。それがORIGINAL LOVEの前身レッドカーテンというバンドのものでした。

——下北沢とは、ご縁があるんですね。

十数年前までアトリエ兼仕事場を構えていた場所でもあります。昔、喫茶店でアルバイトをしていた経験もあるし、僕にとっては一番なじみのある街。18歳で上京してから、レコード屋さんや古着屋さん、ライブハウスなどにもしょっちゅう足を運んでいたんで、遊び場という感覚もあります。

今はベンチャー企業みたいな感じ

——Negiccoというアイドルの曲をプロデュースしたり、多くの若手ミュージシャンと共作・共演をしたり、最近若い世代のミュージシャンとのコラボレーションが多い印象ですが、何かきっかけがあったんでしょうか？

『Love Jam』という自主イベントをやっているんですが、その影響は大きいです。自分が好きなアーティストと一緒にやりたいという思いでスタートして、今年で開催4回目を迎えました。正直、フェスやイベントに呼ばれる時って、自分が今本当に好きな音楽を、好きなアーティストと一緒にやるということが難しかったんです。じゃあ自分で企画しようと思ったのが『Love Jam』。大変だけど達成感はずいぶんあります。そこで出会ったミュージシャンとは終わった後も交流があるし、自分が音楽をやる上で良い刺激や張り合いになってます。

Negiccoもそうだけど、今の世代って自分たちで企画してイベントやツアーをやるケースが多いんですよ。なんならマネジメントまでやっちゃう。それってすばらしいことだと思うし、『Love Jam』はそういう考え方に基づいてやってます。周りがお膳立てしてくれるものに乗っかってばかりでは、アーティストでなくなっていってしまう気がします。アーティストは自分が思っていること・感じていることを表現してこそ。経済的な失敗というリスクはあれど、今が音楽をやって一番楽しい時期。すごく自由になりました。

——音楽を始めた頃のような感覚でしょうか？

いろいろなことを自分で考えながらしたいことをする、という意味ではそうかな。今は、ベンチャー企業みたいな感じですかね（笑）。

——メジャーデビューした90年代と比べて、今の音楽シーンをどう感じますか？

チャートを見ても相容れないというか、全然違う方向を見てる音楽性のものがいっぱいあって、昔に比べてすごく多様化したと思います。僕はロックをはじめ、ジャズやクラブミュージックなどにも影響を受けてきたんですが、同じような音楽を独自の感覚でミックスアップしている若いバンドが多くておもしろいし、何といっても話が合うんです。好きな音楽が似てるからですね。自分がカッコいいと思ってた音楽が、今もカッコいいと思われていることがうれしいです。あとは、単純に今の20代は演奏もうまいし、洗練されていると感じる人が多い。日本の音楽は垢抜けたなと感じます。

センスがより問われる時代に

——新しい音楽も常にチェックされているんですか？

昔からレコードを聴くことが多いんですが、最近ではサブスク**を利用して新しい音楽も聴いています。年齢が上がってくると、相対的に若い世代をひとくりに判断してしまいがちだけど、それって良くないと思うんですよ。昔は僕もそうでしたが、「俺は他の同世代のやつらとは違う」って思ってる若者は必ずいるじゃないですか。だから、「今の若者」っていっしょくたにしていると、間違えてしまいますよ。

——ネットやSNSの出現が、今の音楽シーンに大きな影響を与えていると思いますか？

そうですね。ただ、いろいろな音楽があるけど、僕はやっぱり音楽的な音楽が好きなので、出会う音楽に対しては、きちんと聴いて向き合うようにしています。どんなに流行っててもつまらない音楽はつまらないし、そこを判断する力というか、センスがより問われる時代になったなと。情報が多ければ多いほど、情報の選び方で違いが出てくる。そこで良いセンスを持っているやつが、良いものを作っていくんじゃないでしょうか。

——長きに渡って、ポップスシーンで活躍してきた田島さんですが、ご自身にとってポップスとはどのようなものだと思いますか？

音楽としての構造が美しくて、センスの良いもの。それが僕にとってのポップスです。ビートルズもバート・バカラックも、スティーヴィー・ワンダーもそう。彼らが売れた理由、やっぱりそれは曲がいいから。プレゼンがうまいやつっているでしょ。そうではなく、例えばプレゼンが下手でも口下手でも中身が良ければいいんです。音楽もそれは一緒。逆にいうと、たとえ曲が良くなかったとしても、話題性などでヒットすることはある。だけど、そこを追いかけても仕方がないと思うし、僕は自分の好きなスタイルを貫いていきたいです。

世間が用意した枠に入っていくことは考えてないですね。僕が表現したものにみんながどう反応するのかということには興味がありますが、通りいっぺんの言葉、データやイメージなどで判断されるのはおもしろくない。今回のアルバムに関してもそう、現時点で思い残すことのないくらいの最高傑作に仕上がったので、単純に音楽そのものを聴いて感じてほしい。それで、カッコいいと感じてくれればうれしいですね。

بوبكون* : ヤマハポピュラーソングコンテスト

サブスク** : サブスクリプション。定額制聴き放題の音楽サービス

PROFILE

田島貴男 (ORIGINAL LOVE)

Tajima Takao

ミュージシャン。1985年、ORIGINAL LOVEの前身となるバンド“レッドカーテン”を結成。1987年、バンド名を“ORIGINAL LOVE”に改名。現在に至る。本年2月に約4年ぶりとなるORIGINAL LOVEの18枚目のオリジナル・アルバム「bless You!」を発表。

ORIGINAL LOVE "bless You!" Tour

2019年7月20日(土) 18:00 中野サンプラザホール
全席指定 6,480円
お問合せ: ディスクガレージ 050-5533-0888
(平日12:00~19:00)

取材協力: リトルソウルカフェ

世田谷区北沢 3-20-2 大成ビル 2階

tel. 5454-9800 営業時間 20:00 ~ 26:00

取材・文: 濱安紹子 / 撮影: 末武和人